
刊行にあたって

本書は、月刊デンタルダイヤモンド2024年11月号から2025年10月号まで連載された「エビデンスに基づくう蝕予防プログラム」全12回の内容をもとに、誌面の関係で収録しきれなかった情報なども加えて再編したものである。う蝕予防に関するエビデンスは歳月を重ねるとともに絶えず更新され続けており、すでに定石となった古典的な知識から、比較的最近に発表された新たな知見まで、可能なかぎり多くを盛り込んだ。

う蝕予防における最善のアプローチとは、う蝕のプロセスを根本的に理解すること、そしてう蝕リスク評価の方法論を用いて、リスクレベルに応じた化学的介入療法の実施と、最小侵襲の修復処置、ならびに定期来院による予防管理を実践することである。本質を述べるならば、守るべき原理原則は「病理的因子を抑制し、防御因子を強化する」ということに尽きる。より具体的には、いかなる場合でも患者の病理的因子に応じた再石灰化療法を用いること、また一方で食物の摂取頻度などにより細菌の活動性が高い場合には患者自身の予防行動を強化する行動変容を促し、ときに補助的な手段として抗菌療法を用いること、などが挙げられる。もし患者に唾液分泌量の減少や唾液の機能不全がある場合はさらに深刻であり、より多くの処置と集中的管理が必要とされるが、これらのアプローチはすべて、すでに十分なエビデンスが揃っている。臨床の場で実際に患者一人ひとり異なるう蝕リスクを特定し、その発症と進行を抑制するための適切な処置を検討するにあたって、本書の内容はおおいに貢献できるものと確信している。

う蝕リスクを下げることに成功すれば、患者の口腔衛生の改善に寄与するだけでなく、歯の将来的な生存率を向上させることで全身の健康増進、QOLの維持にも繋がっていく。そして、日々の臨床を根気よく続けていけばその成果はいずれ「地域社会における年齢階層別DMFTの改善」などといったかたちで疫学データに反映されるだろう。それが予防歯科の目指すべきゴールであり、同時に次のレベルへのスタート地点になる。たやすい道のりではないが、歯科医療従事者にとっておおいにやりがいのある仕事といえるのではないだろうか。

2026年1月

麻生幸男
